

Sanefuji, W., Wada, K., Yamamoto, T., Mohri, I., & Taniike, M. (accepted). Development of preference for conspecific faces in human infants. *Developmental Psychology*.

ヒト乳児の社会的認知は，多様な環境から“自分と似た存在”としてヒトに選択的な注意を向けることに始まると仮定されてきた。実際，ヒトは生後すぐから顔配列を長く注視するが，顔配列の中でもヒトの顔の重要性が増す時期は明らかでなかった。そこで，本研究では，生後1, 3ヵ月児を対象にヒトとサルの顔写真を用いて選好注視や馴化脱馴化法から検討した結果，乳児は少なくとも1ヵ月時点でヒトとサルを区別できるが，ヒトという種全般への選好は3ヵ月の間に形成されることが分かった。本知見は，発達心理学領域のみならず，ヒトにおける同種認知という側面で比較認知科学領域において，また，最初期の社会的認知の様相という側面で臨床心理学領域においても注目を集めている。

Sanefuji, W., & Ohgami, H. (2013).

“Being-imitated” strategy at home-based intervention for young children with autism. *Infant Mental Health Journal*, **34**, 72-79.

行為者による自閉症児の模倣を継続することが社会的認知発達を促進する可能性について検討した。随伴行動あるいは模倣行動の提示を2ヵ月間継続し，対象児が示す他者への注視，模倣，他者意図理解につい

て介入前後で測定した。その結果，模倣群は行為者への注視が全体的に増え，子ども自身の模倣に至る可能性が示された。他者意図理解には有意な変化は認められず，2ヵ月間ではあるいは模倣だけでは，他者意図理解に至らない可能性が考えられる。本研究は自閉症児を模倣することが持つ社会的認知発達への効果を初めて実証した。本論文のベースとして2009年に公表した縦断事例研究は *Psychological Today* (Sep 30, 2009), *Autism Early Interventions* (Jan 6, 2013) 等で注目されたが，本知見によって自閉症療育の更なる進展が期待される。

Sanefuji, W., & Ohgami, H. (2011). Children's responses to the image of self, peer, and adult: Autism and typical development. *Research in Autism Spectrum Disorders*, *5*, 1194-1200.

“Like me” 仮説は，他者が自己と視覚的に類似することの気付きから他者の心の理解へ至ると仮定する。他者の心の理解が観察されにくい自閉症児は，自己と視覚的に類似した他者に対して反応が見られにくいのだろうか。本研究では定型発達及び自閉症幼児における自己や自分と同年齢児への反応を検討した。その結果，定型発達児も自閉症児も自己に選好を示したが，同年齢児には定型発達児のみ選好を示し自閉症児は選好を示さなかった。自閉症児に視覚的自己理解は確認されるが自己と類似した他者への反応には般化されず，自己と他者を繋ぐ経路に何らかの障害がある可能性が

ある。本知見は，自閉症児における視覚的に自己と類似した他者への反応を示した初めての実証データと評価される。

Sanefuji, W., & Ohgami, H. (2011). Imitative behaviors facilitate communicative gaze in children with autism. *Infant Mental Health Journal*, **32**, 134-142.

自閉症児を模倣すると他者への注視が増える可能性が示されるが，模倣のどの側面が効果をもたらしたかは明らかでない。本研究では，自閉症児の行動に時間的に随伴して反応する随伴行動，時間的随伴性も行動形態的類似性も包含する模倣行動を提示し，それぞれへの反応を比較した。その結果，模倣行動中・後のみ行為者への注視が増えたことから，自閉症児が示す模倣への反応はその時間的随伴性より行動形態的類似性によって引き起こされると考えられる。自閉症は自他の類似性の検出が難しいと仮定されるが，“いま・ここ”の行動に関する自他の類似性には感受性が認められる。本知見は，自閉症療育に関する記事（Follow the leader, The Hanen Centre, Canada）での周知等，国際的にも注目された。New Investigator Award（World Association for Infant Mental Health）受賞論文。

Sanefuji, W., Ohgami, H., & Hashiya, K. (2008). Detection of the relevant type of locomotion in infancy: Crawlers versus walkers. *Infant*

*Behavior and Development*, **31**, 624-628.

乳児は自己と類似した他者に関心を示し、動きの側面では、乳児の行動を他者が模倣する等の“いま・ここ”の行動の類似性への選好が挙げられる。乳児は、“いま・ここ”に限らなくとも、自己がよくする動きに類似した動きにも注目するのだろうか。本研究では移動形態に焦点を当て、日常と類似した移動形態を選好するか検討した。すると、ハイハイの乳児はハイハイのバイオロジカルモーション（BM）、歩行する乳児は歩行のBMを選好し、観察した動きに自分が日常遂行している動きとの類似性を検出していることが示された。行為の産出—知覚のリンクであるミラーニューロンについて、乳児期における詳細は研究途上にあるが、本知見はある動きの産出がその知覚と密接に関連していることを示す行動的証拠である。